

中間支援活動助成(基本)事業 実績報告

団体名	(特非)場とつながりの研究センター	代表者名	(職名) 理事長	(氏名) 長谷川計二
事業名	NPOの自己診断力を高めるための評価のあり方研究会			

< 事業実施実績 >

	相談業務 延べ回数/団体数	ネットワークの構築 ・情報提供 件数	人材育成 (講座開設等) 延べ参加人数/回数	書類作成指導 件数	その他 (調査研究等) 件数
R6 実績	356	85	研究会3回	52	38
R7 計画	300		研究会2回		
R7 実績	364	102	研究会3回、 研修会1回	52	20

< 効果と成果 >

場とつながりの研究センターは「意欲する人」が集う場を作ることを目的に立ち上げた団体で、関心をもつプロジェクトにスタッフや支援者が集まってくる場づくりに取り組んでいる。すべての活動において「当事者の声を聴く」ことを軸に取り組んでおり、被支援者がいつまでもその地位にいるのではなく支援者側に回るような「役割シャッフル」を通して主体性を育み、有力な運営スタッフに育つなど、キャリア形成の視点からNPOとの関わり方を提案できているように考えている。

NPO相談支援事業では、民設民営の強みを活かしてアウトリーチ支援をはじめ団体の実情に合わせたオーダーメイドの支援に取り組んできた。NPOを「社会参加の器」として捉え、寄付・助成金やボランティアなどさまざまな社会資源を集めること・参加の方法についての支援を試行・実践してきた。NPO支援は単につなぐ・紹介する・情報を提供するのではなく、何を生み出そうとしているのか、本当の解決の状態とはなにか、継続的な関与のあり方も含めて支援のあり方への問いに向き合って対応してきた。

NPO評価は多様な軸があるが、当法人の強みである「対話」を活かした組織評価の1つの型が大まかにできたように感じている。実践事例を増やし、より内容の濃い支援につなげていきたい。

< 今後の展望 >

NPO自身が振り返りをしたり、セルフ評価をしようとする動機が薄く、なぜそれをする必要があるのか、その結果どのような効果があるのかを、支援者側から魅力的な提案をする必要がある。それが、「寄付が集まる(かもしれない)から」などのような金銭的メリットだけにとどまら自分たち自身の原点を見つめ直すことや、自身の強みを理解すること、その結果として活動をさらにいっそう広げていきたいと思えるようになることこそが、評価の目標であると考えられ、そのような動機づけの工夫が求められる。

一方で、支援者側も、自身の経験からくる思い込みが働いたり組織を見るうえで正常性バイアスが働くなど、自身の支援傾向を理解する必要がある。そのためには、「観察する観点」を

予め学び、複数人での支援を通して自身が支援するときと観察するときとでどのように見えているかを言語化して共有する研修機会が必要で、それを実践できたことは大きな成果と考える。

ただし、支援者研修のファシリテーターの能力によって大きく影響を受けるため、標準化するための方法論には行き着かなかった。今後、考えを深めていきたい。

< 収支決算書 >

(収入)

項 目	金 額 (円)
中間支援活動助成金	500,000
対象者負担 (参加費・相談料) 等	193,287
合 計	693,287

(支出)

区分	項 目	金 額 (円)	左のうち 助成対象金額 (円)
直 接 経 費	人件費	560,000	446,600
	旅費交通費	26,085	5,000
	謝金	35,000	35,000
	その他 (研修費等)	40,702	13,400
	小 計	661,787	500,000
	間接経費 (一般管理費)	31,500	0
	合 計	693,287	500,000